日本で生きるトンガ王国出身ラグビー選手

卒業論文発表会　山口ゼミ４年　原田 有里子

【卒業論文要旨】

南太平洋のポリネシアに属するトンガ王国は、南太平洋で唯一の王国であり、ヨーロッパ諸国からの植民地化を免れた唯一の国である。このトンガでは、近代化に伴い 1960 年～1970 年代以降、トンガ人の海外移住と母国送金の重要性が高まり、国技であるラグビーの選手もグローバルマーケットの中で重要な人的資源となってきた。そして、現在は彼らの移住先として日本も注目されてきている。まず２章では、かつて海外出身選手に対して閉鎖的であると言われてきた日本ラグビー界が、海外出身選手をどのように受け入れてきたのか見ていく。３章では、トンガ側の背景を辿り、移民や送金の実態を見ていく。そして４章では、日本で生きるトンガ出身ラグビー選手が、どのようなきっかけで来日し、その後どのような生き方をしているのか見ていく。

【発表構成】

1. 本論文について（先行研究 / 研究目的 / 研究対象 / 研究方法）
2. 日本ラグビー界における海外出身選手の受け入れ変遷
3. MIRAB 社会トンガ側の背景
4. 日本で生きるトンガ出身ラグビー選手の生き方
5. まとめ

主要参考文献----------

〈日本語文献〉石川栄吉,加藤めぐみ,小林泉,越智道雄,百々佑利子 2010『オセアニアを知る事典』pp. 403-405 東京印書館 / 小野塚和人 2019「第 58 回 GCI 講演会報告南の島のラグビー強豪国―トンガとフィジーにおけるラグビーの持つ社会経済的意味」/ 北原卓也 2010「在日トンガ人ラグビー選手の日本社会でのポジション」『環境創造』13　pp. 130-146 / 込山駿,橋野薫 2020『平尾誠二を語る』pp. 144-149 草思社 / 笹川太平洋諸嶼国基金「やしの実大学ポリネシア講座」（https://www.spf.org/yashinomi/polynesia/seminar/mainichi08.html）（最終閲覧日 2020/5/28）/ 小学館 2020『エイティ・ミニッツ日本ラグビー応援ムック』2 / 棚橋訓 1997「MIRAB 社会における文化の在り所_ポリネシア・クック諸島の文化政策と伝統回帰運動」『民族学研究』61(4)pp. 567-585 / 棚橋訓 1997「ランガチラの誕生とアヴァイアキの夢_クック諸島ラロトンガ島の一地域指導者を通してみた MIRAB 社会の国家像」アジア経済研究所（編）『海洋島嶼国家の原像と変貌』pp. 193-236 / 長戸結未 2014「トンガ社会における海外居住者からの寄付を集める募金」『国際開発研究』23(1)pp. 133-145 / 長戸結未 2013「トンガ人による母国送金の現状と定義」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』105pp. 1-9 / 長戸結未「133-トンガ経済と海外送金」/ 西野照太郎,三輪公忠 1990『オセアニア島嶼国と大国』彩流社 pp. 15-34, pp. 359-396 / 日豪プレス 2017「日系コミュニティで活躍ローカル人･インタビュー」（https://nichigopress.jp/interview/local-intvw/152393/）（最終閲覧日 2020/12/27）/ 日本ラグビーフットボール協会「日本ラグビーデジタルミュージアム」（https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/1310375100）（最終閲覧日 2020/12/1）/ ベースボール・マガジン社 2001「日本ラグビーの 100 年の記憶」『B.B.MOOK160 スポーツシリーズ』89 /法務省 2019「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」（http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html）（最終閲覧日 2020/11/22）/ 山川徹 2019『国境を越えたスクラム―ラグビー日本代表になった外国人選手たち』中央公論新社 / 山本真鳥 2000『新版世界各国史 27 オセアニア史』山川出版社 pp. 13-15, pp. 24-28, pp. 40-46, pp. 60-63, p. 76, pp. 290-293, pp. 295-297, pp. 301-311, 付録 pp. 14-57　**〈大宅壮一文庫雑誌〉**『アサヒ芸能』1987 年 1 月 p. 42 / 1987 年 9 月 p. 39 /『Emma』1987 年 1 月 pp. 12-13 /『財界』1973 年 9 月 p. 86 /『週刊朝日』1986 年 11 月 pp. 184-185 / 1987 年 1 月 p. 155 /『週刊サンケイ』1974 年 12 月 p. 31 / 1980 年 10 月 pp. 3-7 / 1980 年 11 月 pp. 112-113 /『週刊新潮』1973 年 10 月 p. 19 /『週刊文春』1987 年 1 月 pp. 147-149 /『週刊プレイボーイ』1986 年 4 月 p. 228 /『週刊宝石』1986 年 1 月 pp. 38-40 /『週刊ポスト』1979 年 11 月 p. 19 / 1987 年 1 月 pp. 43-44 /『TOUCH』1987 年 1 月 pp. 8-9 /『Number』1987 年 2 月 pp. 40-44 /『FOCUS』1987 年 1 月 pp. 30-31, pp. 52-53 /『Friday』1985 年 9 月 pp. 64-65 / 1987 年 1 月 pp. 12-13『平凡パンチ』1987 年 1 月 pp. 24-25 /『ラグビーマガジン』1983 年 11 月 pp. 2-3 / 1984 年 5 月 pp. 4~5 / 1987 年 3 月 pp. 8~11 /1987 年 11 月 pp. 14-15, pp. 80-81　**〈英語文献〉**Niko Besnier 2012 “The athlete’s body and the global condition: Tongan rugby players in Japan” AMERICAN ETHNOLOGIST　39(3)pp. 491-510 / Pita Taufatofua 2011 “MIGRATION, REMITTANCE AND DEVELOPMENT TONGA” FOOD AND AGRICULTURE ORGANIZATION OF THE UNITED NATIONS pp. 5-17 / The World Bank 2019 “Remittance Inflows To GDP (%) ” Global Financial Development | Data Bank (worldbank.org)（最終閲覧日 2020/12/1）

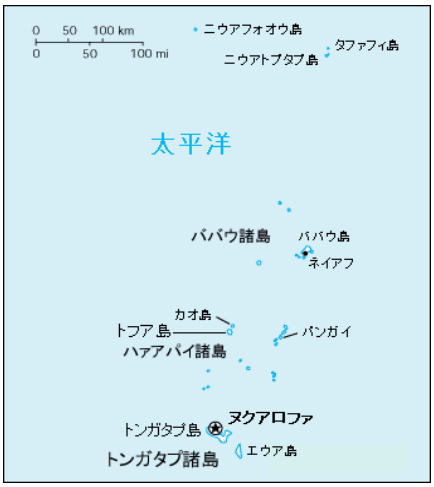

図１　トンガ王国

表１　日本の企業チーム所属選手数

（北原（2010 年）・雑誌『エイティ・ミニッツ日本ラグビー応援ムック』（2020 年）を基に作成）

年	海外出身選手総数(人)	トンガ王国出身選手数(人)
1978	2	0
1987	4	2
1990	9	2
2000	96	17
2010	104	20
2020	249	35

表２　2006 年～2019 年の在留トンガ人数推移　（在留目的別）

（法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」を基に作成）

年	総数	外交	公用	教授	宗教	教育	技術	人文知識・国際業務	興行	技能	文化活動	短期滞在					留学	就学	研修	家族滞在	特定活動					永住者	日本人の配偶者等	永住者の配偶者等	定住者
												計	観光	商用	親族訪問	その他					計	ワーキング・ホリデー	アマスポーツ選手		その他				
																							本人	家族					
2006年	128	x	x	1	-	-	1	7	2	-	2	-	-	-	-	-	30	12	5	6	35	-	x	x	35	15	11	-	-
2007年	119	x	x	1	-	-	-	8	1	-	-	1	-	-	1	-	29	9	1	5	37	-	x	x	37	17	9	1	-
2008年	133	x	x	1	-	1	-	9	1	-	-	1	1	-	-	-	31	9	3	5	45	-	x	x	45	19	8	-	-
2009年	116	x	x	-	-	1	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	32	6	1	1	36	-	x	x	36	23	8	-	-
2010年	106	x	x	-	-	1	-	7	1	1	-	1	1	-	-	-	34	x	2	2	28	-	x	x	28	24	4	-	1
2011年	103	x	x	-	-	4	-	7	1	1	-	-	-	-	-	-	32	x	2	4	23	-	x	x	23	23	5	-	1
2012年	127	3	1	-	-	3	-	8	1	1	-	10	-	-	9	1	38	x	1	5	22	-	16	2	4	24	8	-	2
2013年	126	2	1	-	1	2	-	14	1	1	-	1	-	-	1	-	45	x	-	6	17	-	13	1	3	26	7	-	2
2014年	132	2	1	-	1	2	-	13	1	2	-	12	-	2	10	-	43	x	-	13	10	-	9	-	1	22	9	-	1
2015年	129	3	2	-	-	2		13	2	1	-	9	3	1	4	1	44	x	-	11	9	-	8	1	-	22	10	-	1
2016年	138	2	1	-	1	1		13	2	2	-	11	2	4	5	-	49	x	2	9	14	-	10	3	1	20	10	-	1
2017年	141	3	1	-	-	1		11	1	2	-	3	1	-	2	-	58	x	-	16	12	-	10	1	1	21	11	-	1
2018年	161	2	1	-	-	2		9	2	1	1	7	1	-	6	-	69	x	-	15	16	-	11	4	1	21	14	-	1
2019年	180	3	1	-	2	3		12	2	-	1	15	1	-	14	-	63	x	-	19	20	-	16	3	1	23	15	-	1

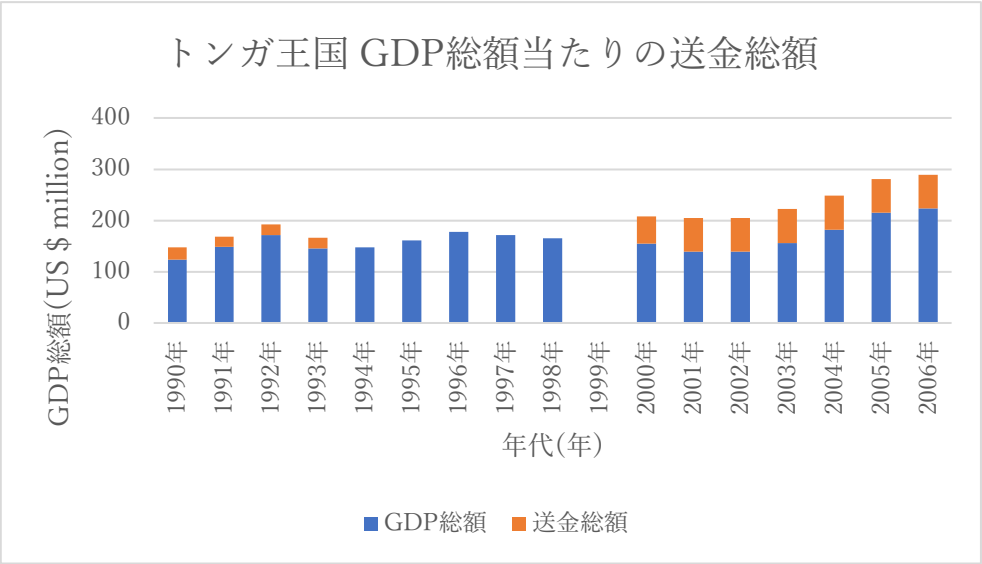

図２　トンガ王国 GDP 総額当たりの送金総額

（長戸氏「133-トンガ王国経済と海外送金」（トンガ王国準備銀行・アメリカ移民政策研究所から引用）

表３　年別 GDP あたりの送金流入（%）（世界銀行の報告を基に作成）

1990	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
21.1	29.6	25.7	20	19.9	19.3	27.2	26.9	34.4	31.5	36.8

表４　日本ラグビー界の年表（日本ラグビーフットボール協会日本ラグビーデジタルミュージアムを基に作成）

年	出来事
1823	**【イングランド】**イングランドのラグビー校でフットボールの試合中にウィリアム・ウェブ・エリス少年がボールを持って走り出した →ラグビーフットボールの起源と言われる →現在、ラグビーワールドカップ優勝杯は、エリス少年の名を取って「ウェブ・エリス・カップ」と呼ばれている☒
1863	**【イングランド】**フットボール協会(FA)設立 →当時ラグビー校などで許されていた、ボールを抱えて走るルールが禁止される
1866	【日本】日本の横浜に横浜フットボールクラブ(YC＆AC)設立。日本駐在や寄港した英国人たちが試合を楽しんでいた
1871	**【イングランド】**ラグビーフットボール連合(RFU)設立 →フットボール協会(FA)に反対し、ボールを抱えて走るルールを支持する人々によって結成された →その結果、フットボール協会(FA)のルールを採用する「協会式フットボール(アソシエーション・フットボール)」と ラグビーフットボール連合(RFU)のルールを採用する「ラグビー(ラグビー・フットボール)」の２つの流れができた →パブリック・スクール(イギリスで中世以来の伝統を持つ私立中等学校)で推奨されたラグビーは、次第にイングランド北部の労働者階級や ウェールズ地方の炭鉱労働者にも普及した →ラグビーの試合は週末に行われるため、週６日働く労働者階級の選手たちは試合に出るために仕事を休まなければならなかったが、 休業補償を求めた北部のクラブに対し、アマチュア主義を貫くラグビーフットボール連合(RFU)はこれを認めなかった
1886	**【世界】**国際ラグビーフットボール評議会(IRFB)設立 →1997年に国際ラグビー評議会(IRB)に改称 →2014年にワールドラグビー(WR)に改称
1895	**【イングランド】**ノーザンラグビーフットボール連合(のちのラグビーフットボールリーグ)設立 →イングランド北部の労働者階級の人々によって結成された →イングランド南部を母体に大学同士の対戦などアマチュア主義を中心にするラグビーフットボール連合(RFU)と イングランド北部を母体に報酬を目的としたノーザンラグビーフットボール連合(のちのラグビーフットボールリーグ)の２派に分かれることになった
1899	**【日本・大学】**日本ラグビー発祥。慶應義塾大学でE.B.クラークがケンブリッジ時代の盟友田中銀之助とともに、この年の秋、塾生にラグビーを教えた
1918	**【日本・高校】**全国高等学校ラグビーフットボール大会スタート
1926	**【日本・協会】**日本ラグビー蹴球協会設立。名誉会長は田中銀之助
1930	**【日本・代表】**日本代表初のカナダ遠征 ●日本代表メンバー 登録選手数：24人(海外出身選手１人)…台湾人
1944	太平洋戦争のためスポーツ活動は全面中止となった
1945	ラグビー復活スタート
1963	**【日本・大学】**全国大学ラグビーフットボール選手権大会スタート
1978	**【日本・企業】**イギリスのオクスフォード大学を卒業した２人が日本で初めて海外出身ラグビー選手として神戸製鋼と契約
1980	**【日本・大学】**トンガから２人の留学生が大東文化大学へ(１回目)　★トンガ出身初 →**ホポイ・タイオネ**、**ノフォムリ・タウモエフォラウ**
1985	**【日本・大学】**トンガから２人の留学生が大東文化大学へ(２回目) →**シナリ・ラトゥ**、**ワテソネ・ナモア**
1987	**【第１回ラグビーワールドカップ】**(in ニュージーランド・オーストラリア) ●日本代表メンバー 登録選手数：26人(海外出身選手２人/トンガ出身選手２人) トンガ出身選手：**シナリ・ラトウ**(大東大)、**ノフォムリ・タウモエフォラウ**(三洋東京)、
1991	**【第２回ラグビーワールドカップ】**(in イングランド・スコットランド・ウエールズ・アイルランド・フランス) ●日本代表メンバー 登録選手数：26人(海外出身選手２人/トンガ出身選手１人) トンガ出身選手：**シナリ・ラトウ**(三洋電機)、
1995	**【第３回ラグビーワールドカップ】**(in 南アフリカ) ●日本代表メンバー 登録選手数：26人(海外出身選手４人/トンガ出身選手３人) トンガ出身選手：**シナリ・ラトウ**(三洋電機)、**シオネ・ラトウ**(大東大)、**ロペティ・オト**(大東大) **【世界】**プロ化容認 →それまでの「アマチュア規定」(プレーによる報酬を禁じる規定)が撤廃され、プレーによる報酬が容認された
1999	**【第４回ラグビーワールドカップ】**(in イングランド・スコットランド・ウエールズ・アイルランド・フランス) ●日本代表メンバー 登録選手数：30人(海外出身選手６人/トンガ出身選手０人)
2000	**【日本・協会】**プロ化容認 →世界の情勢に従いアマ・プロのオープン化に踏みきり、ラグビーの発展、強化に取り組むことを決定した
2003	**【第５回ラグビーワールドカップ】**(in オーストラリア) ●日本代表メンバー 登録選手数：31人(海外出身選手４人/トンガ出身選手０人) **【日本・社会人】**社会人の日本最高峰の全国リーグ「ジャパンラグビートップリーグ」がスタート
2007	**【第６回ラグビーワールドカップ】**(in フランス・ウェールズ・スコットランド) ●日本代表メンバー 登録選手数：32人(海外出身選手８人/トンガ出身選手３人) トンガ出身選手：**ルアタンギ侍バツベイ**(近鉄)、**ナタニエラ・オト**(東芝)、**クリスチャン・ロアマヌ**(埼玉工大)
2011	**【第７回ラグビーワールドカップ】**(in ニュージーランド) ●日本代表メンバー 登録選手数：34人(海外出身選手12人/トンガ出身選手：３人) トンガ出身選手：**バツベイ・シオネ**(パナソニック)、**タウファ 統悦**(近鉄)、**ホラニ 龍 コリニアシ**(パナソニック)
2013	**【日本・協会】**公益財団法人へ移行。公益財団法人日本ラグビーフットボール協会
2015	**【第８回ラグビーワールドカップ】**(in イングランド) ●日本代表メンバー 登録選手数：31人(海外出身選手10人/トンガ出身選手：２人) トンガ出身選手：**ホラニ 龍 コリニアシ**(パナソニック)、**アマナキ・レレィ・マフィ**(シャイニングアークス)
2019	**【第９回ラグビーワールドカップ】**(in 日本) ●日本代表メンバー 登録選手数：31人(海外出身選手15人/トンガ出身選手：５人) トンガ出身選手：**ヴァル アサエリ愛**(パナソニック)、**中島 イシレリ**(神鋼)、**ヘル・ウヴェ**(ヤマハ)、**アマナキ・レレィ・マフィ**(シャイニングアークス)、 **アタアタ・モエアキオラ**(神鋼)

表５　トンガ王国の年表

（『オセアニア島嶼国と大国』・『オセアニアを知る事典』・「国際機関太平洋諸島センター　各国情報_トンガ」・『新版　世界各国史27 オセアニア史』・「トンガ王国憲法と民主化運動」・『トンガの文化と社会』・駐日トンガ王国大使館 Facebook を基に作成）

年	出来事
約3200年前	オーストロネシア人たちが東南アジアから移動、トンガに定住し始めた
紀元前800年	先史時代に、フィリピンやフィジーから、トンガにラピタ文化が伝わり、約1000年続いた
950年	ツイ・トンガ１世即位、最初の王国が成立 →その後、３つの王朝による分立国家の状態が始まった
1200年頃	ツイ・トンガ11世により、ハアモンガ・ア・マウイ建設
1470年	ツイ・ハア・タカラウア１世即位
1610年	ツイ・カノクポル１世即位
1616年	オランダ人探検隊J.ルメールとW.スホーテンがトンガ諸島タファヒ、ニウアトプタプ、ニウアフォウを発見、上陸 →これが初めてのヨーロッパとの接触となった
1643年	タスマンがトンガ諸島に到着
1773年	イギリス人の探検家ジェームズ・クックがトンガタブ島、ハアパイ島に来航 →トンガ人の親切さに感銘を受け『フレンドリー島』と命名(１回目)
1774年	クックがトンガに来島(２回目)
1777年	クックがトンガに来島(３回目)
1797年	ロンドン伝道協会、トンガに宣教師派遣(失敗)
1822年	ウェズリー派(ロンドン伝道協会から分派/後のメソジスト教)の宣教師たちが上陸
1845年	キリスト教徒のジョージ・**ツポウ１世即位**(1845～1893年在位) →それまでは内戦が続いていたが、他の２つの王朝の王位継承者がいなくなり、1865年に**トンガ王国統一**
1875年	成文憲法 公布 ※宣教師ベーカーがツポウ１世に助言 →憲法がキリスト教教義を含意
1876年	無償の初等教育を義務化
1893年	ジョージ・ツポウ２世即位(1893～1918年在位) …ジョージ・ツポウ１世の曾孫
19世紀末	**ラグビーがトンガに伝来** …シドニーのニューウィントン・カレッジ留学から帰国した８名のトンガ人高校生がトンガの若者たちに紹介
1900年	ジョージ・ツポウ２世が英・トンガ友好保護条約締結 →英国の保護領となり、外交と国防をイギリスに委ねる ※植民地ではない
1918年	サローテ・ツポウ３世(サローテ女王)即位（1918～65年在位） …ジョージ・ツポウ２世の娘 →47年に渡り平和を重んじる優しい行政を行ったため、多くの国民に慕われ、今でも愛されている
1924年	トンガが国際ラグビーに初参加
1941年	太平洋戦争、トンガは連合軍(イギリス軍)の一員として参戦 →ソロモン諸島を占領した日本と戦った
1965年	タウファアハウ・ツポウ４世即位（1965～2006年在位）
1970年	英・トンガ友好保護条約全面改正発効 →英国の保護領ではなくなり、英国より外交権を完全に回復 （内政が安定したため） この頃、トンガ人が**賃金労働機会を求めて海外移動開始** (最初はニュージーランド、オーストラリア、ハワイ、アメリカ大陸へ)
1970年	トンガと日本が外交樹立
1974年	6歳～14歳までの児童に対する無償教育が定められた
1975年	1975年憲法
1980年	**２人のトンガ人が日本の大東文化大学へそろばん留学(初)…ノフォムリ・タウモエフォラウ、ホポイ・タイオネ**
1985年	**２人のトンガ人が日本の大東文化大学へ留学　　…シナリ・ラトゥ、ワテソニ・ナモア**
1988年	1988年憲法
1992年	「民主主義支持運動」の名で政治グループが組織された …国民の間から民主化を望む声が大きくなり、議会にも民主化促進に賛成する動きが見られるようになった
1999年	国際連合に加盟
2006年	ジョージ・ツポウ５世即位(2006～2012年在位) …ツポウ４世の長男 首都ヌクアロファ市街地で民主化促進派によるデモが起きた …政治体制改革の遅れに抗議した若者たちが合流して広がった
2009年	日本大使館開設
2012年	ツポウ6世即位(2012～2020年現在も在位) …ジョージ・ツポウ５世の弟